

「柀(ひいらぎ)の花」を読んで

馬場駿

本書は、戦死という形で夫を失った相原ゆう(一九一七年生れ・二〇〇四年本書発行当時八六歳)の詩・短歌・各種寄稿を網羅した珠玉の折々の記である。彼女は太平洋戦争開戦の昭和十六年、相原昭夫と結婚し大仁町で開拓した畑の一角に六畳一間の新居を構えた。だが新婚生活はたった三年で終る。昭和十九年、夫は召集されて満州に赴き、喝病(えつびよう)に因り八月十日に死亡した。遺骨はついに帰らず、彼女は戦争寡婦(かむ)としてその後を、夫に「会えず」に過(こ)した。『ひとひらの骨無き墓に花供え水供えつつ五十年経し』

思うに本書には、内容として不即不離の關係にはあるものの、本来全く異質な二つの鑑賞法がある。①先ずは刊行の目的にもなっている、戦争を否定し平和の大切さを知ること(に)重きをおくもので、この立場では彼女の「戦争否定の生き証人」という側面が重要視される。ピュリッツァー賞に輝くジョン・ダワーの「敗北を抱き

しめて」第一章の中の「破壊された人生」での相原ゆうの扱いはその最たるものであり、本書でも冒頭で紹介されている。この狙いから本書の格調高い編み方が生まれ、彼女の作品の資料価値も上がっている。反面、親しみ易さが減じ、次に述べる「愛」の側面がやや後退した。これは戦争を知らない世代にも読んでもらおうとするならば、少々損な側面と言えなくもない。私は、②時代の束縛のために公然夫に愛情を示せず、また、極めて若くして夫を失ったにも拘わらず、戦争未亡人であるがゆえに次の愛に移行できず、娘や孫の成長と彼らの笑顔の中に、自らの宿命を昇華させるほかは無かつた一人の女性の愛情物語としての側面に重きを置いて、本書を鑑賞した。次に掲げる数首は、②の解釈の礎となつたものである。

『征(い)く夫を赤子のごとく抱きし姑(しゅうとめ) われは指だにふれず別れぬ』そしてこのときが今生の別れになる。『興安嶺(こうあんれい)・中国の東北地方の山脈の名に果てたる夫よその際(きわ)に われを呼びしや 姑を呼びしや』そのいずれかを問うのは、単なる妬心の

表白ではない。次の二首にも繋がる魂の籠(こ)もった抗議だ。『再婚は戦争寡婦の罪とされし 三十二歳の日の恋』・『子育てに追われし頃は夢にだに 見ざりし夫の夜毎(よごと)哀しき』

出征を見送ったときの姿で「輝く」夫の残像が、相原ゆうの詩歌の中にはある。独り齢を重ね、老いていくだけの自分は、そのまま贖罪の姿なのか。死んでしまった愛(あ)い夫への「憾(うら)み」、生き残った女の「地獄」、二つの極限を彼女は文字に刻む。『玉砕の日は廻りきぬ 黙禱を捧げるだけの妻長らえて』

私はこの作品集を文学作品として読んだ。史料としてもでもなく、反戦を声高に叫ぶ政治的作品としてもでもなく。それなのに、戦争は地上最も忌むべきものだと、心に確かに残った。

『とげの葉がくれに黒曜石の

イヤリングのような実がいつぱいつく頃

出稼ぎの人らは帰ってくるけれど

あの人は還ってこない

私は一人で畑を耕して

町まで種を買いに行く

くる年も くる年も

こうして柀の木には大きなコブができ

私の髪はこんなに白くなったのに

あの人はまだ還らない』(詩「柀によせて」から)

ここ何年も、これほどに心が揺さぶられたことは無

い。